

山中村長の山を育てる夢は更に大きいものがあつたが、村の財政を考
えれば自から限界があり、お城コに続く嘉瀬山八十五町歩を官行造林と
して、国の経費で植林を進めたのも特筆すべきであらう。
当時の官行造林の契約書の抜粋を記す。

公有林野官行造林契約書

台帳面積 八拾五町貳反五畝貳拾歩
一、実測面積 八拾五町貳反五畝歩
植栽予定樹種 あかまつ、くろまつ、からまつ
植栽予定期間 自 昭和四年 拾年間
至 昭和拾参年
伐採予定期間 自 昭和参拾四年 参拾年間
至 昭和六拾参年
収益分収の歩合 国 五分
村 五分

(省略)

図面別紙

昭和四年拾壹月壹日

青森営林局長営林局技師 丸山 佐四郎
嘉瀬村代表 嘉瀬村長 山中 禮一
別紙省略

土岐石人書

裏面には、「植林成就記念」

分會長 山中 熊四郎
副 長 鳴海 武雄
理事 中野 万助
班 長 吉崎 民次郎
山中 文蔵
榎引 嘉七郎
評議員 土岐 粕五郎 山中 利助
鳴海 全四郎 鳴海 大次郎
沢田 竹次郎 山中 清市
松川 新八 斎藤 善作
内海 精蔵 山中 辰三郎
木下 市太郎 土岐 繁美
工藤 賢治 沢田 沢一
鳴海 賢 伊藤 定五郎
黒川 俊吉

正会員 阿部佐吉、松川孫作、小山内繁男、吉崎丸市、須崎由次郎、
蛸嶋茂作、山中要吉、平川久四郎、小山内定次郎、津田繁四郎、中村正
一、山中興七、神島友作、吉崎又四郎、甚万作、土岐武蔵、工藤保雄、
吉崎十造、沢田三長、鳴海大吉、花田柁八、工藤林蔵、斎藤由八、木立
又五郎、榎引藤之助、吉崎男治、鎌田万次郎、木下綱五郎、原田奥太郎、
山中文男、吉崎専四郎、鈴木万次郎、出町有造、斎藤亀吉、鳴海貞雄、
工藤松市、阿部定平、山中林次郎、鎌田真太郎、工藤六郎、鎌田春吉、

このようにして六十年前の施策が、財政的にゼロに等しい嘉瀬財産区
に今数百万円の金が入ってきたのである。
嘉瀬財産区では、嘉瀬老人クラブへ十万円、嘉瀬小学校へ十万円、金
木町立第四保育所(嘉瀬)へそれぞれ寄附したと、金木だより(町広報)
に報じてある。

嘉瀬財産区では、植林成就記念碑を建てたのが昭和十一年四月廿九日、
碑面には後援者として、

村 長 山中 禮一
伊藤 亀吉
鳴海 由次郎
高橋 竹太郎
助 役 土岐 只七郎
鳴海 民之助
小学校長 棟方 万九郎
区會議員 工藤 清助 外崎 男茶
工藤 弥一郎 木立間 五郎
小松 定五郎 澤田 與三郎
山中 芳造 秋元 幸一郎
秋元 元吉 今 喜工作
山中 藤四郎 土岐 辰五郎
今 末太 鳴海 善八
花田 柁五郎 木村 治一郎
松山 永作 平川 由雄

加藤勇二、神島安次、木下豊八、小山内兼蔵、津田興八、鳴海正三、阿
部重左エ門、須崎為三、伊藤左エ門、鳴海峰四郎、伊藤重太郎、山中幸
八郎、斎藤義勝、秋元万四郎、山中敏一、土岐安五郎、鎌田孫造、山中
市太郎、木下勝三郎、沢田竹四郎、秋元茂雄、山中武太郎、松川万次郎、
神島三吾、沢田金次郎、鎌田善七、三上保作、秋元金五郎、鳴海武太郎、
蛸嶋太郎、小山内繁四郎、平川由八、木立久蔵、須崎豊作、松川巻雄、
鳴海善七郎、江良友太郎、山中永三、花田柁義、花田武雄、鳴海秀雄、
松川利男、今重四郎、沢田繁男、白川政五郎、山中一二三、中野金作、
三上兼五郎、土岐岩五郎、木下平
内、吉崎年一、廣瀬與七郎、伊藤
竹五郎、山中伊三、伊藤直作、小
松平内、須崎弥四太郎、木立又五
郎、山中文雄、山中英治、鎌田武
智、原田金四郎、沢田武津、舛甚
万次郎、原田億三郎、山中秋男、
須崎万助、土岐繁呂。
この記念碑には、植林に参加で
きなかつた者でも一口三十銭の拠
出で名前を刻んでもらえたとい
うことである。

現在この石碑は、小田川城正門
前右手にあって、その南側下には
三左エ門溜池が満々と水を溜めて



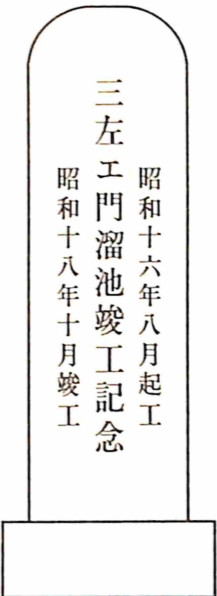
三左エ門溜池

いる。なお、お城山植林保護のため昭和十一年四月三日に嘉瀬森林保護組合が設立された。

三左エ門溜池の水は、小田川ダム建設以前には、村の西方旧十川近くの駒留地区の水田まで、小田川からの取水量の補給として数百町歩に利水されていたもので、先人たちの植林は、よく保水も考えたもので水田農業の基本をわきまいたものである。

三左エ門溜池の改修記念碑も近くに建てられているが、

昭和十六年八月起工
三左エ門溜池竣工記念
昭和十八年十月竣工



裏面には、三左エ門溜池委員、委員長山中兼蔵、副委員長今喜衛作、會計平川久四郎、委員Ⅱ外崎万次郎、山中賢作、山中連吉郎、鳴海藤太郎、小山内定次郎、木下與七、工事請負者山中與七と記されている。

ふるさとのかたりべたちは、昭和五十二年六月嘉瀬旧道（下ノ切道）とお城山の实地踏査をして（かたりべ第一集参照）加勢城想定図を作っている。アイヌ砦の特徴である二重、三重の空壕が認められたのである。加勢館の空壕確認については、町の郷土史家白川兼五郎氏（現金木町文化財審議会議長）が、戦後に郷土史家の福士貞蔵氏を嘉瀬お城山に案内して調査したところ空壕の状況から、この山はアイヌ館のあったところだと判定したと聞いている。

昭和十五年八月十五日発行金木郷土史の(三)金木館址の項に

——口碑に『昔金城と称する御城があった、金木といふ地名は是に由来したものである云々』とある。果たして金城は金木と書く様になったものかどうか、早速肯定する訳には行かぬが、金木館のあったのは事実である。編者は館址を見出すべく各方面隈なく踏査したが、他に夫れら



加勢城本丸跡

しい場所は見当たらず。恐らくは此の高屋敷なるものは金木館の形見であらう。此処は天正の昔対馬右衛門太郎という豪族の居った所である。當時は未だ喜良市あたりに大酋長連が居て、金木飯詰間は往復が出来なかつたという物騒な時代であつたが故に、斯かる要害地に居て構へて警戒したものであらう。右衛門太郎の子孫は連綿として今日に至り、現戸主今五郎傍系と云れるは高屋敷の中心部に居を

占めて、ありし昔を偲ばせている。

併し該は対馬右衛門太郎の創設したものではない。其の以前に浪岡北畑氏の幕下金木弾正忠の居った所である。即ち浪岡名所旧蹟考の浪岡北畑氏全盛時代に於ける幕僚の館主豪族の中に『金木館には金木弾正忠』とあり、又津軽古城古館主覚に『金木館金木弾正忠』と載せられている

加勢城（加勢館）については、次のような記述もある。

加勢館の言い伝え

昔、蝦夷館は加勢館（化瀬佐助館の説もあり）と云い、飯積（飯詰）玄武砦（後の高橋城）の支城としてアイヌ砦の最後の館であつた。

高橋城は、安東高星（八幡太郎義家に敗れた安部貞任の次子）の築城、後に安東に身を寄せた萬里小路中納言藤原藤房（朝日氏）の居城となる。

朝日氏に忠誠を尽す蝦夷の酋長八重、佐助は、十年間に及ぶ高橋城攻めの大浦（津軽）為信軍を散々に悩まし敗るが、金木館の対馬右衛門が朝日氏への裏切りにより帰来夷地館、加勢館も次々と落城、八重、佐助の一族も力尽きて遂に天正十六年六月主従皆討死したと、伝えられる。

参考

この山は、元祖右エ門太郎と関係のあった蝦夷の首領佐助、音女の砦であつたと云うこと、幾重もの堀が現存していることです。四百年の昔、天正十六年（一五八八年）三代目寛書の中に為信の許しを得て金木館を下見分に行く件があり、その途中、首領の佐助、音女を色々だまし、酒を飲ませ計略にまかり成り、とあり、蝦夷の権力をうまく計ったということでしょうか。

また蝦夷の主領地は金木館に近いことから考え右エ門太郎は酒、嗜好品などを携えて訪問、何等科の挨拶会話が あつたに違いない。

後伸

飯詰高橋城最後攻略は、右京為信津軽統一の関ヶ原であつた。此の時の金木館城主対馬右衛門太郎義英は金木中興の祖であり高橋城主朝日左衛門尉行安公に忠誠した八重も小田川の砌と運命を共にしたものと思ふ。

一部飯詰などに残っている文書に金城館領主を津島金右エ門とあるが、あやまりである。対馬右衛門太郎源義英が正しい。

札幌市在住 対馬 義二

から、同人の居った事は間違なからう。然るに小倉氏行岳史談に『金木弾正忠は姦臣鼻和田宮少輔との口論に依たり君命に依り切腹す云々』とある。果たして然りとせば其の館跡に対馬右衛門太郎なる者が腰を据えたものと見ねばならぬ。

尚序に対馬氏と飯詰村高館との関係を書いて見よう。方々由緒記に

対馬（一に津島）圓三先祖は右衛門太郎と申して、為信公御代下ノ切之内金木に而御派仕立願之通り被仰付候得共、其比飯詰は南部領に而従来

難儀成、其植林喜良市に佐助ヲトナと申狄人罷有、追付候ては追拂候に付、相馬之澤より脇道タカワナと申所より川舟に而金木忍従来いたし、其後あと狄へ究、金木に罷有候段申植林候処、弥御派可仕旨破付候間、天正十六年右之古村より銘々引越し、右川通之タカワナ難所之旨候処、何卒飯詰御切取可被遊居候間、御案内申上様被仰出、則右衛門太郎御先立仕、飯詰西口に尻ナシと申所より御馬入、御引取被遊居候由、其後開発知行三十右被下置候、五代の惣四郎百石也家督変、七代目定次郎半知になり、八代目当時之圓三也

とある。即ち対馬右衛門太郎は為信公を尻無方面より道案内して飯詰を責め落したというのである。想いに二百九十年前の正保の図を見ると嘉瀬・三好あたりまで湖水が入り込んでいる。況んや三百五十六年前の天正年間なら、尻無方面は無論湖水であつたと見ねばならぬ。縦し湖水でなかつたとしても萱の范にたる范知で、迪も軍馬の通れる所ではなかつたものと推量されましたが故に、編者は飯詰村誌に対馬金右衛門説を本文とし、右衛門太郎説を参考とした諺だが、今回左記の如き右衛門太郎説を裏書する有力な史料が発見された。

安部勇蔵由緒書

(前略) 下ノ切之内飯積は南部領之事故、古俗瑞祥院様藩祖為信公御下知を不相守事ども御座候に付、同所可被遊伐御手配之処其頃喜良市と申所に八重・佐助連兩人狄の酋長罷在、色々之術を以って御手配を相防、思召御成就之程難計に付、路程案内等能存可罷在候義、新城白旗之館より山越に牛介安部孫三郎信友罷在候而、先つ右之狄兩人を討取可申旨被仰出、侍二十騎被差添、同所江相向ひ右兩狄を牛介討取、其段早速注進差立、夫より相馬澤脇道高鼻川と難所を瀬踏仕、西口尻なしと申所より御馬を入、御先立申上、暫時に飯積領喜良市澤目迄無残方御手に入候云々

右由緒に據れば牛介即ち安部孫三郎信友が案内した様に見えるが、尤も同人は先陣を難めたではあろうが、土地の實情に明るい対馬右衛門太郎の案内したという記事も動かぬ所であろう。夫れは兎も角も、為信公の尻無方面ヨリノ進軍説が千斤の重さを為した讀である。

茲に是非附け加えるて置かねばならん事は、対馬金右衛門なる者が下ノ切道より進撃したいと説である。八重・佐介兩人の酋長が為信の手配を妨害したという記事は注目せねばならぬ。加之長者森辺に母衣懸・蓑捨という遺蹟もある点を観れば、此の説も満更捨てる訳にも行かない。或いは同方面よりの進軍は失敗に終わった関係上、思いも着かぬ尻無方面の難所を犯して不意打したのかもしれない。暫く記して後考を俟つ。

——以上は、皇紀二千六百年と町制施行滿二十年を記念して発行された金木郷土史(福土貞蔵氏編集)の記述である。

さて、ここで現在のお城山について語ろう。

平成二年五月の或る朝の新聞折り込みに次のようなチラシがあった。

津軽の一角に

忽然とお城が出現!!

あなたなら、このお城に

どんなネーミング(命名)をつけますか?

嘉瀬と金木の間の川コで有名な小田川が山裾を流れる嘉瀬山、通称お城山に、金の鯨が燦然と輝く三層の白亜の天主閣が築かれました。

この城は、徒手空拳から現在の財を築いた津軽が生んだ青年実業家、東北興産株式会社社長三上誠三氏が二年の歳月をかけて築城したものである。

三上誠三氏は、二十八歳の若さで金木町長選挙に立候補したこともあり、戦国時代の大名秀吉を畏敬し、自ら「羽柴秀吉」を名乗るなど、木下藤吉郎の草履取から、関白大閤の地位まで登りつめた積極的な努力と、天下の覇権をその手にした秀吉を人生の手に生き抜いて来たという。

三上氏は、この金木に生まれ、金木に育った金木の人間として、町をこよなく愛し、その活性化の意欲に燃え、観光開発の一端とも言える、近く竣功すお城(松江城を横したものを)を金木町民からの公募により命名し、数百年の末まで残そうと考えているのです。あなたなら、何と呼び名をつけますか?

どうぞ、はがきに住所・氏名・年齢・電話番号と「○○○城」と書き、次の宛先へお寄せください。

嘉瀬山お城命名審査委員会

一人何通でも応募できます。

締切は六月十五日(当日消印有効)

入選者には、竣功式に招待し、賞金拾万円を差し上げます。

◎ 参考例Ⅱ白鷺城(姫路城)、鶴城(会津若松城)、千鳥城(松江城)、鳥城(二本松城)、白鳥館(藤崎城)、四方拝館(高楯城)

また、裏面には

加勢城跡に柵を復元する

会員募集!!

嘉瀬観音山(町立嘉瀬スキー場)から東方に通称お城山と言われる小高い山がある。

南側は深い沢を閉止めて溜池(三左エ門溜池)とし、北側の山裾は小田川が蛇行し、西側は丈余の葦葎が生え湿原(現況は水田)であり、東側は山、沢、山、谷が連なり、続く山嶺には小径があつて中山山脈を越えて内部(青森市内真部)、新城、油川(いずれも現青森市)方向へと続いている。

加勢城の起源、沿革は明らかでないが、平安時代末期蝦夷型式で築かれたと見られ、二重、三重の空壕が現存(S54・7・8ふるさとを探る会で現地調査)している。後に飯積高楯城(現五所川原市飯詰を支援した夷人酋長夷地八重・佐介の祖先が住居としたものと思われる。「天正六年(一五七六年信長時代)から大浦為信(津軽為信)の軍勢



▼空壕跡と空壕の上に建てた柵▲

が行丘(浪岡)城主北畠頭村を攻落した勢いを以って飯積城を刃下に誅せんとして総勢一千五百騎を飯積に向はしたるも神山にて飯積軍の伏岳に不覚を突かれて大浦軍は敗北せり。

——天正九年四月九日三千五百を以って尻無より攻めるも、高楯に加

勢せる夷人兵八重、佐介酋長に囲まれ、丈余枯葎原を進軍せる大浦軍は枯葎に火を放たれ、大浦軍火中の中惨敗し、為信危うくこの難に九死に一生を得、火傷多く受けて脱し、暫く高楯城攻めを断念す。

——天正十六年(一五八八年秀吉時代)大浦軍が総勢二千五百騎にて高楯城を囲み、その一方帰来夷地夷軍酋長小田川佐介及び加勢野八重等の砦を奇襲討伐なし、高楯城の孤立を謀れり。

——天正十五年金木館津島金衛門の朝日氏(高楯城主)への反権により、高楯城は天正十六年六月十六日落城、夷人酋長八重、佐介も討死した。

Ⅱ東日流外三郡誌よりⅡ

このように八百年前からあったと思われるお城山の加勢城跡に、このたび三層白亜の天主閣が築かれたのを機会に、蝦夷館柵を復元し、嘉瀬お城山を後世まで語り伝えたいと思います。(注・加勢城跡蝦夷館柵



の復元については、土地所有者三上誠三氏より承諾をとっている。町の文化財としても価値のあるお城山を柵の復元によって保存し、今後観光資源の一つとしても位置づけたいと考えております。以上の主旨に賛同の多数の方のご参加を望みます。

◆ 蝦夷館柵復元募金

▽賛助金 一口千円（何口でも結構です。）

▽賛助者の氏名は掲示板に記録して、柵の前に建てます。

▽賛助金の納金は、申込用紙（農協窓口にあり）に記載して、嘉瀬農協預金講座「加勢白柵復元助成会」へ入金してください。

▽賛助金の締切は六月末日まで。

平成二年五月

加勢城柵復元期成会

発起人代表 山中 正津

発起人 木村 金利

岩村 条太郎

木村 治利

木立 久二

お城山の北端に築城されたお城は、町民の関心だけでなく県内外からの見物客が引きも切らず、一日に数十名に至り、遠くは大坂から来たと言う人もあり、マイクロバスで津軽遊覧の観光客が、吉幾三（本町出身歌手）の邸宅見物と合せ、お城も観せてほしいというのが多かった。

このお城を築くため、三上氏は約六千万円をかけたと言う。その規模は、地上十九メートル（鯨までの高さ）で、下坪は四、五間×四、五間

応募総数は一六三点にのびました。一人で数点を応募した方もあり、その熱心さに驚くばかり。

また、城の見学者も毎日のようにあり、城の周辺整備が完成すれば、金木町の観光名所になることは確実とみられている。

三上誠三氏は、金木町の活力の一端となるならば、更に私財を投じて町民の憩いの広場を造成し、お年寄りたちのためゲートボール場や薬草園を造ることも考えているという。

大昔、この地で邑をつくり、生活を営んだ蝦夷（アイヌ）の人々の霊を慰めるため、大仏建立も頭の中にあるとか。今年のお盆は盛大な盆供養と盆踊り大会を計画中という。

このように今後いろいろなイベントが企画されているが、この土地の目玉はやはりお城であり、その名称もこの土地にふさわし命名でなければならぬというので、「命名審査委員会」に金木町の有識者二十名を委嘱（うち六名は健康上の理由で辞退）慎重に審査してもらった。

審査委員長に

白川兼五郎氏を選任

一六三点の応募の中から、たった一点を選ぶための審査委員会は、去る六月十五日、嘉瀬お城山の三上誠三氏宅において第一回委員会を開き、委員長に白川兼五郎氏、副委員長に山中正津氏を選任、審査要領等を決めた。

第二回委員会は六月二十三日、同じく三上誠三氏宅にて開催。まず先の委員会で決めた審査要領を確認、更に、当選者名称応募者複数の場合、賞金を抽選にするか按分にするかで約一時間も論議したが、結論として射幸心を得るための賞金ではなく、名称を考える労苦に対する謝礼とい

で二〇、二五坪（六六、八三平方米）、二階は四間×四間で一六坪、三階は二間×二間で四坪、一階と三階は畳敷きで、二階板敷きとなっている。一階は畳四〇帖の大広間で三階は八帖の畳敷きに、三尺の手摺りのついた回廊で、ここからの眺望はなんとも言われない絶景である。

中心の通し柱は、お城山の木を使い、直径四〇センチ、末口三〇センチのものを立て、これを支えるに基礎杭に八メートルのパイル四本を打ち、一メートル立方の捨コンクリートの上に通し柱を乗せたものである。築城の位置は、お城山北端の標高約三十メートルの崖の上であるが、十一トンダンプで八五〇台の土を運搬して盛り、四隅には八メートルのはかに四メートルパイプ十六本打ち込み、盛土の搗き固めは時間をかけて施行し、生コン一三〇立方メートル（基礎の重さにして二四七トン）を用、屋根は銅板葺きで耐用年数は設計基準からみて五百年以上とされている。

昭和六三年（一九八八）六月土盛工事に着手し、平成二年（一九九〇）三月天主閣建立に着手して同年七月二十五に光成するまで二年間の歳月をかけている。

さて、お城り命名の結果はどうなったか。次に、町民毎戸にいったん亘って配付された嘉瀬山お城命名審査委員会発行のチラシで紹介しよう。

嘉瀬山お城

命名 『小田川城』に決定!!

当選者 日 高 徹 郎ほか七名

—— 応募総数 一六三点 ——

人生流転の中、嘉瀬お城山に居を構えた東北興産株式会社社長三上誠三氏が、お城山に築城した城の名称を金木町民から広く募集したところ、う意味から、当選名称応募者数による按分にする、ということになった。

第一次予選で、奥津軽城、鷺泊城、小田川城、嘉瀬城、星雲城、東日流羽柴城、旭ヶ丘城、日柴城、柴和城、羽柴城、津嘉城、日吉丸城、朝日ヶ丘城、金誠魂城、三誠城、龍興城が選ばれ、第二次予選はこの中から選ぶことになり、東日流羽柴城（二点）、小田川城、旭ヶ丘城、朝日ヶ丘城、嘉瀬城、羽柴城、金誠魂城、日柴城（三点）、小田川城、旭ヶ丘城、（二点）、嘉瀬城、津嘉城、金誠魂城、日柴城となったが、この中から一点だけに絞るには投票では困難となり、結局、小田川佐介という蝦夷の酋長が住んだ所、山裾を小田川が流れ、呼び易く土地の人々からも親まれる名称ということから、全会一致で「小田川城」と決定した。

小田川城と投票した方は、日高徹郎（喜良市）、山中靖子（嘉瀬）、白川兼吾（金木）、白川照磨（金木）、白川兼五郎（金木）、白川津世（金木）、鳴海昭治（金木）、今天照彦（喜良市）の八名。命名認定証と賞金（十万円を八人で按分）の贈呈は七月中旬予定の小田川城落成式の際おこなうことになった。

○ 応募された名称で同名のものもありますので、それを整理しますと、次のとおりです。

- ▼ やっこ城（二十一点） ▼ 小田川城（十点） ▼ 旭ヶ丘城（六点）
- ▼ 津軽城（四点） ▼ 朝日ヶ丘城（四点） ▼ 三上城（四点） ▼ 嘉誠城（三点） ▼ 金木城（三点） ▼ 青雲城（二点） ▼ 大宰城（二点）
- ▼ 雲雀ヶ丘（二点）、▼ 中山城、（二点） ▼ 鶯城（二点） ▼ 稲荷

- 城(二点) ▼平成城(二点) ▼金誠城(二点) ▼奴城(二点)
- ▼三誠城(二点) ▼白峰殿 ▼えいど城 ▼ふるさと城 ▼なんだべ
- 城 ▼わいは城 ▼じょんから城 ▼加勢城 ▼相之城 ▼彦山城
- ▼平成城 ▼松ヶ丘城 ▼松山城 ▼鷺泊城 ▼風雪城 ▼鶴雲城
- ▼鷺坂城 ▼松月城 ▼松見城 ▼松ヶ城 ▼祥雲城 ▼奥津輕城
- ▼誠山城 ▼松鳳城 ▼花誠城 ▼鹿誠城 ▼香誠城 ▼華誠城 ▼誠
- 煌城 ▼暁城 ▼城山城 ▼八重佐助城 ▼雷城 ▼東日流羽柴城
- ▼旭ヶ丘城 ▼新松 ▼日吉丸城 ▼奴城 ▼羽柴城 ▼大和城 ▼千
- 鳥城 ▼天誠城 ▼梵天城 ▼東誠城 ▼柴秀城 ▼東北城 ▼津輕金
- 木城 ▼千鶴城 ▼東青山城 ▼東三城 ▼北松三城 ▼津嘉城 ▼世
- 界城 ▼嘉瀬城 ▼芦ヶ原城 ▼日柴城 ▼緋鯉城 ▼満天城 ▼松森
- 城 ▼小田城 ▼松視城 ▼松影城 ▼里見城 ▼龍誠城 ▼興誠城
- ▼秀誠城 ▼平誠城 ▼龍興城 ▼龍神城 ▼龍神城 ▼興福城 ▼柴
- 和城 ▼ひばざくら城 ▼東天晃城 ▼嘉瀬山城 ▼榮楽城 ▼白砂城
- ▼白砂城 ▼錦石城 ▼朧月城 ▼鷹城 ▼天の川城 ▼桜城 ▼牡丹
- 城(以上)

命名審査が終って、審査委員会白川委員長は次のコメントを発表した。

お城命名にあたって

日高見の国の朝明け、旭ヶ丘の山幸多く山狭の朝露立ち込める畝び山の麓、広い原野を五、六頭の若駒にまたがり、若い男女は一団、また一団と後の世のやぶさめの如く、この国の山野に獲物を求める馬上での活躍は見事であろう。

長い冬籠りから解放され、日一日と緑増す五月太陽も夕日ヶ丘の空を赤く染めて静かに沈んでゆく西方浄土浜の夕焼けは実にきれいだ。

夢に「城を建てろ、この山に城を造れ」と毎晩のように出てきたので、神のお告げと思い、築城を決意しました。

今年の四月の中ごろでしたか、山中正津さんが、田へ砂を散らすためブルドーザーを貸してもらいたい、と言って事務所へ来た時に、お城山の話をお聞きしました。

お城山へお城を建てる。この偶然もかねて信心している神様が命じたのかも知れません。私はお城山のことを話してくれた山中正津さんへ新しく出来るお城の名前をつけてくれるよう頼みました。山中さんは、「お城山は八百年もその余も前にアイヌ(蝦夷)の砦として築かれたものだから重要な文化遺産だ。現在残っている空壕を保存して、柵を作らせてくれるなら引き受ける。」と言うので、それを承諾して一切お任せしました。

以上がお城命名にいたる経緯(いきさつ)ですが、金木町民から広く募集し、みんなから愛され、この土地にふさわしい名前をいただき、またこの土地に住んでいたという小田川佐助、加勢八重という蝦夷の酋長の名との因縁(いんねん)も感じられます。いずれにしても、沢山の方々のご苦労に対し心から感謝申し上げます。

最後に、お城命名審査委員の皆様から敬意を表し、また、町民の皆様もお気軽にお城を見にお出でくださるようお待ちしております。

敬白

お城命名審査委員会

委員氏名

- 委員長 白川 兼五郎(金木)
- 副委員長 山中 正津(嘉瀬)

この国は海幸多く、後の世の人はこの国を亀ヶ丘と言う。タイムは二千年を経て、山幸多い旭ヶ丘に津刈蝦夷の堅固に砦が築かれていた。八重、佐助、音女の首領は五百を越える蝦夷の強者。主君高橋城への忠誠は大浦の大軍は撃退。右京為信をして大いに悩ます。津輕蝦夷最強で最後の砦で、小田川城消えて四百五十年。この国の歴史から消えて久しい。いま、巨大城郭が構築されている。このたび一般より公募審査により、城名「小田川城」と命名なつたことは、史蹟としてこの地にふさわしく、遠水の栄を希い、喜びに耐えませぬ。

文化財審議会議長

白川 兼五郎

城主三上誠三氏のことば

私が嘉瀬山に造つたお城に対して沢山の方たちから名前を寄せられ、このたび、お城命名審査委員会から「小田川城」の名称を戴き、まことにありがとうございます。



小田川城

私がこの土地(嘉瀬お城山)を入手したのは、全くの偶然で「瓢箪から駒」とはこの事でした。私は、日頃稲荷神社を信仰していますが、この山を買ってから、

委員

- 木下 巽(嘉瀬)
- 花田 松義(嘉瀬)
- 斎藤 重清(嘉瀬)
- 木村 治利(嘉瀬)
- 土岐 輝雄(嘉瀬)
- 神島 りえ(嘉瀬)
- 成田 せち(中柏木)
- 中谷 専之助(川倉)
- 荒関 治衛(金木)
- 今 キネ(喜良市)
- 米谷 甚九郎(喜良市)
- 宮崎 初太郎(喜良市)
- 木立 民五郎(嘉瀬)

このようにして、現在の小田川城は建てられ、命名されたのである。また、同じチラシに柵復元についての記事もあった。それには、

加勢城跡柵復元事業

労力奉仕者募集!

先に、蝦夷親柵復元募金を行いましたところ、賛同者は県内外の金木町出身者からありました。一口千円の募金では、到底事業費は賅い切れないことは最初から予想はしていましたが、より多くの方たちに参加してもらえよう、

拠出し易い金額を決めました。郷土の文化遺産をみんなの手で護ろうという趣旨でご協力を呼びかけているものです。

七月中旬から事業に着手したいと思っておりますので、労力の提供者を歓迎します。

作業は、道普請、柵を建てるための穴堀、木材の運搬などです。ご協力いただける方は、町内名、氏名、電話番号をお知らせ願います。

△ 賛助金の受付締切りは七月末までとしますので、嘉瀬農協窓口で申込みくださるようお願いいたします。

加勢城趾柵復元期成会

現在残っている空壕は、深さが二、七メートル、下幅三、六メートル、上幅約一二メートルで長さ約一八メートルが確認されている。昭和五十四年夏に实地踏査した時には、三、四十メートル位の長さの壕跡が三カ所ほどあったのだが、今は柵を復元する箇所ともう一つ奥の方に一カ所より見当たらない。

これらは黒土や土砂販売によって姿を消してしまったのである。

土取り作業に従事した人の話によれば、現存空壕から南側の緩斜面からは多くの木炭が出て来たと言言している。空壕を巡らした高台は見張り櫓を建てたところであり、木炭屑が出土した場所が居住区であったのだろう。

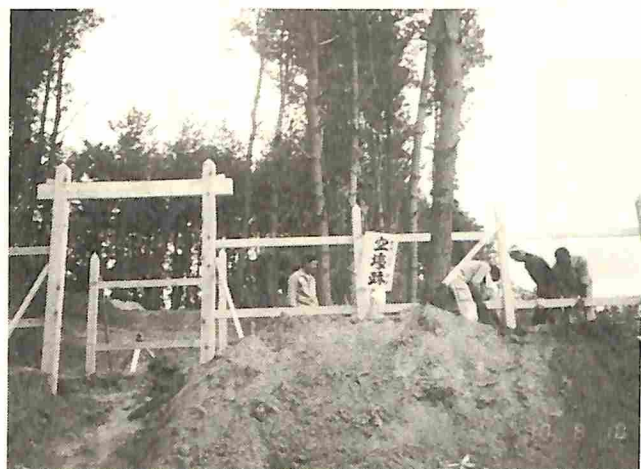
加勢城趾柵復元期成会が募った賛助金は平成二年八月三十一日現在で三十三万五千円になった。そのうち訳は、千円が九人、二千円が七人、

三千円六人、四千人一人、五千円十人、一万円四人、二万円一人、三万円一人、五万円一人、十万円一人で合計四十一人の三十三万五千円である。

協賛者の氏名を掲げれば

- | | |
|--------|--------|
| 金木町嘉瀬 | 三上誠三 |
| 〃 | 山中正津 |
| 〃 | 木立民五郎 |
| 札幌市 | 對馬義二 |
| 金木町喜良市 | 小野正之 |
| 青森市 | 鶴谷義則 |
| 金木町金木 | 白川兼五郎 |
| 〃 嘉瀬 | 伊藤広子 |
| 〃 | 木村治利 |
| 〃 | 須崎寅雄 |
| 〃 | 鳴海昭治 |
| 青森市 | 鎌田秀雄 |
| 金木町嘉瀬 | 成田善彦 |
| 〃 | 木村金利 |
| 〃 | 岩村桑太郎 |
| 〃 | 山中哲司 |
| 〃 | 土岐輝雄 |
| 〃 | 山中治 |
| 〃 | 小山内嘉一郎 |
| 〃 | 甚頼壮 |
| 〃 | 鳴海興八 |

- | | |
|--------|--------|
| 金木町中柏木 | 原田万治 |
| 〃 | 成田せち |
| 小田原市 | 今兵市 |
| 金木町嘉瀬 | 中野博臣 |
| 〃 | 須崎正敏 |
| 〃 | 山中長三郎 |
| 〃 | 秋元惣之進 |
| 金木町金木 | 小山内トシエ |
| 〃 | 荒関治衛 |
| 〃 嘉瀬 | 花田松義 |
| 〃 喜良市 | 今キネ |
| 〃 嘉瀬 | 神島りえ |
| 〃 | 斎藤重清 |
| 〃 金木 | 須崎八重 |
| 〃 | 須崎幸造 |
| 〃 喜良市 | 須崎千代治 |
| 〃 | 須崎春光 |
| 青森市 | 木村米吉 |
| 東京都 | 山中伸治 |
| 金木町嘉瀬 | 木村勇健 |
| 〃 | 小野留造 |
| 〃 | 秋元清逸 |



柵復元作業

例を記せば、

本榑柵址 羽後国 飽海郡本榑村大字城輪
柵の構造は、文字通り材木を列立したものである。但し、普通に所謂柵の如く、柵木と柵木との間を広く明けたものでなく、太さ六〇七寸乃至一尺余の角材を殆ど間隔のないほど密接して立て並べたものである。普通一列であるが、場所によっては二重になっている所もある。高さは一間半乃至二間位であつたらしい。下部は堀立てで埋め込んである。

柵列の間と櫓らしいものの跡が介在している。門は支那の邑城の如く、……三間二面で柱間は十一尺程で、柱の径は二尺程で堀立である。(日本城郭史 大瀬伸・鳥羽正雄著)

柵は常時の築城、就中臨時築城の場合最も多く用いられたらしく、城郭の主要防禦設備であつたかの観がある。木材の豊富な我国に於いてさもあるべきことである。されば東北地方では、城郭を城或は館と称する外柵とも称して居たのは、一には前代からの云う慣はしではあらうが、これと関係がある。柵は天然の樹木を伐採し、或者は立木をそのままをさへ利用出来るから、人工の進まぬ時代の臨時築城には至極好都合のものであつたらう。半永久的なものには樹皮を剥ぎ削つたものもあらう。(中世の築城より)

城柵を復元するにはいろいろ文献を調べて見たが、日本城郭史にある